

# 学位請求論文審査報告要旨

2020 年 2 月 12 日

申請者 田 佳月

論文題目 アカデミック・ライティングにおける不安の実態と授業参加による変化  
ー日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象にー

論文審査委員 西谷 まり  
柳田 直美  
石黒 圭

## 1. 本論文の内容と構成

日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生は、大学での勉学に対応するため、アカデミック・ジャパニーズを身に付ける必要がある。しかしながら、彼らは日本語能力試験日本語能力試験 N1 相当の日本語能力を有していても、アカデミック・ジャパニーズを十分に身に付けていない場合が多い。他方、留学生の日本語によるレポートの執筆力を向上させるため、多くの大学では、留学生のためのアカデミック・ライティング授業が実施されている。本研究は、日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象に、アカデミック・ライティングにおける不安、とりわけ、論証型レポートの作成に伴う不安の実態を明らかにするとともに、アカデミック・ライティング授業による不安の変化を検討することを研究課題としている。

本論文は、全 8 章からなる。その構成は以下の通りである。

## 目次

### 第 1 章 序論

1. 研究背景と研究目的
2. 本研究の構成

### 第 2 章 先行研究

1. 第 2 章の目的
2. 不安について
  - 2.1 心理学における不安の概念
  - 2.2 第二言語不安の研究
  - 2.3 ライティング不安の研究
3. アカデミック・ライティングについて
  - 3.1 ライティングの特徴とメカニズム
  - 3.2 アカデミック・ライティングの定義と種類

|                                      |  |
|--------------------------------------|--|
| 3.3 レポートを中心とした留学生のためのアカデミック・ライティング研究 |  |
| 4. 本研究の位置づけと用語の定義                    |  |
| 4.1 本研究の位置づけ                         |  |
| 4.2 用語の定義                            |  |
| 5. 第2章のまとめ                           |  |
| 第3章 本研究で用いる研究デザイン                    |  |
| 1. 第3章の目的                            |  |
| 2. 混合研究法の定義と混合研究法デザインの種類             |  |
| 3. 本研究で用いる研究デザイン                     |  |
| 3.1 第4章と第5章で用いる研究デザイン                |  |
| 3.2 第6章と第7章で用いる研究デザイン                |  |
| 4. 第3章のまとめ                           |  |
| 第4章 学術レポート執筆不安尺度の作成                  |  |
| 1. 第4章の目的                            |  |
| 2. 項目の選定 -予備調査-                      |  |
| 2.1 予備調査の概要                          |  |
| 2.2 PAC分析を用いた調査方法                    |  |
| 2.3 PAC分析の結果                         |  |
| 2.4 質問紙の項目の作成                        |  |
| 3. 尺度の作成 -質問紙調査-                     |  |
| 3.1 質問紙調査の概要                         |  |
| 3.2 因子分析の結果及び信頼性の検討                  |  |
| 3.3 内容的妥当性の検討                        |  |
| 4. 第4章のまとめ                           |  |
| 第5章 学術レポート執筆不安の実態把握                  |  |
| 1. 第5章の目的                            |  |
| 2. 質問紙調査の概要と分析方法                     |  |
| 3. 調査結果と考察                           |  |
| 3.1 不安得点の基本統計量                       |  |
| 3.2 不安に影響を与える学習者要因                   |  |
| 3.3 各学習者要因による不安の程度の違い                |  |
| 4. 第5章のまとめ                           |  |
| 第6章 学習技術型授業による不安の変化                  |  |
| 1. 第6章の目的                            |  |
| 2. 調査概要と分析方法                         |  |
| 2.1 授業Aの概要と調査協力者                     |  |

|       |                              |
|-------|------------------------------|
| 2.2   | 質問紙及びインタビューを用いた調査方法          |
| 2.3   | 分析方法                         |
| 3.    | 調査結果と考察                      |
| 3.1   | 基礎と技能の不安が軽減された学部 1 年生 A1     |
| 3.2   | 基礎・言語・専門の不安を抱き続ける学部 1 年生 A2  |
| 3.3   | 技能の不安が軽減された学部 1 年生 A3        |
| 3.4   | 基礎・言語・技能・専門の不安を抱き続ける交換留学生 A4 |
| 3.5   | 言語と技能の不安が軽減された交換留学生 A5       |
| 3.6   | 言語の不安が軽減された研究生 A6            |
| 4.    | 総合的考察                        |
| 5.    | 第 6 章のまとめ                    |
| 第 7 章 | 専門基礎型授業による不安の変化              |
| 1.    | 第 7 章の目的                     |
| 2.    | 学習者のピア・レスポンスに対するビリーフについて     |
| 3.    | 調査概要と分析方法                    |
| 3.1   | 授業 B の概要と調査協力者               |
| 3.2   | インタビューを用いた調査方法と分析方法          |
| 4.    | インタビュー調査の結果                  |
| 4.1   | 授業開始時の調査協力者の不安について           |
| 4.2   | 授業中間時の調査協力者の不安について           |
| 4.3   | 授業終了時の調査協力者の不安について           |
| 4.4   | 調査結果のまとめ                     |
| 5.    | 不安の変化についての考察                 |
| 5.1   | 技能の不安について                    |
| 5.2   | 言語と専門の不安について                 |
| 6.    | 第 7 章のまとめ                    |
| 第 8 章 | 結論                           |
| 1.    | 第 8 章の目的                     |
| 2.    | 本研究のまとめ                      |
| 3.    | 留学生のためのアカデミック・ライティング教育への提言   |
| 3.1   | 不安の軽減に向けて                    |
| 3.2   | 不安の作用の再考                     |
| 4.    | 本研究の意義と今後の課題                 |
| 参考文献  |                              |
| 資料    |                              |

## 2. 本論文の概要

第1章では、研究の背景を紹介し、2つの課題を設定した。

課題1：中国語を母語とする留学生が日本語でレポートを作成する際に抱いた不安はどのようなものであるかを解明する。

課題2：アカデミック・ライティング授業を通して、中国語を母語とする留学生のレポート作成上の不安はどのように変化するかを検討する。

第2章では、本研究に関わる2つの重要な概念である「不安」と「アカデミック・ライティング」についての先行研究を概観した。それらの先行研究から、日本語教育における第二言語不安研究では、アカデミック・ライティングに焦点を置いたライティング不安研究が欠如していること、留学生のためのアカデミック・ライティング研究について、不安という観点からの検討が不十分であるという課題が示された。そのため、本研究は、日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象に、アカデミック・ライティングにおける不安、とりわけ、論証型レポートの作成に伴う不安（本研究では、そのような不安を「学術レポート執筆不安」と呼ぶ）の実態を明らかにするとともに、アカデミック・ライティング授業による不安の変化を検討することを研究課題とした。

本研究の調査は、大きく4つに分かれる。学術レポート執筆不安尺度の作成（第4章）、学術レポート執筆不安の実態把握（第5章）、学習技術型授業による不安の変化（第6章）、専門基礎型授業による不安の変化（第7章）の4つである。

第3章では、本研究の第4章から第7章で用いる研究デザインを述べた。本研究の研究課題を解明するためには、量的及び質的研究手法の両方が必要であると考えられるため、量的及び質的研究手法を混合して用いる混合研究法を採用した。

第4章では、学術レポート執筆不安尺度の作成を目的として、まず、都内のA大学で学ぶ中国語を母語とする留学生4名を対象に、PAC分析を用いて予備調査を実施し、学術レポート執筆不安の項目を25項目収集した。その25項目を用い、次に都内の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生105名に質問紙調査を実施し、因子分析を行った結果、最終的に22項目が選定され、学術レポート執筆不安尺度が「日本語表現に対する不安」「文章構成に対する不安」「執筆形式に対する不安」「教員評価に対する不安」「テーマ構想に対する不安」「文献収集に対する不安」の6因子構造であることが明らかになった。

第5章では、第4章で実施された質問紙調査を定量的に分析し、中国語を母語とする留学生の学術レポート執筆不安の実態把握を試みた。その結果、中国語を母語とする留学生が学術レポート執筆不安を抱えている傾向が示され、最大の不安要因は日本語表現で、次に、テーマ構想、教員評価であることが確認された。また、重回帰分析から、性別、及びレポートの得意不得意の自己評価という学習者要因は不安に大きな影響を与えるが、学年、日本語学習歴、日本滞在歴、日本語能力、アカデミック・ライティングの学習経験という学習者要因の影響は小さいということが示された。さらに、t検定や分散分析を用いて各学習者要因による影響を詳しく検討した結果、女性の留学生、レポートの作成に苦手意識がある留学生、

日本語能力が中級レベルの留学生、アカデミック・ライティングの学習経験のない留学生がより不安を感じやすいということが明らかになった。

第6章では、都内のA大学で実施された留学生のための、学習技術型のアカデミック・ライティング授業を調査した。中国語を母語とする留学生6名を対象に、1学期にわたって学術レポート執筆不安尺度を活用した質問紙調査と半構造化インタビュー調査3回ずつ並行的に実施し、授業参加による不安の変化を明らかにした。半構造化インタビューデータの分析には、小規模データにも適用可能な分析方法SCATを採用した。その結果、6名の調査協力者は授業開始当初、アカデミック・ライティングの構成要素である「基礎」「言語」「技能」「専門」の未熟な部分にそれぞれ不安を抱いたことが示されたものの、授業を通して未熟な部分の熟達度が向上することで、不安に変化が生じ、徐々に減少に向かう傾向が見られた。一方、アカデミック・ライティングの構成要素のどの部分が既に身に付いているか、また、授業を通してどのような学びがどこまで達成できたかは異なるため、不安が十分に解消されなかったり、新たな不安が生じたりするケースもあった。調査協力者の不安は授業を通して軽減されたかどうかには個性があると考えられるものの、アカデミック・ライティングの構成要素のどちらにも不安がある場合、1学期間の授業だけではその不安が解消しきれないことも示唆された。

第7章では、都内のA大学で実施された留学生のための、ピア・レスポンスを取り入れた専門基礎型のアカデミック・ライティング授業を調査した。中国語を母語とする留学生11名を対象に、1学期にわたって半構造化インタビュー調査を3回実施し、授業参加による不安の変化を明らかにした。その結果、授業開始時に、6名の調査協力者がアカデミック・ライティングの構成要素である「言語」「技能」「専門」にそれぞれ不安を感じており、授業の進行とともに、執筆形式と文章構成という「技能」に対する不安は大きく減少したが、「言語」と「専門」に対する不安はレポート作成の課題が認識されたことでより多くの調査協力者が感じるようになったことが分かった。授業終了後に、「言語」と「専門」に対し、一部の調査協力者の不安は減少したが、一部の調査協力者の不安は継続しており、また、「技能」の一部である文献収集に対する不安が残存していたことも分かった。文献収集に対する不安が軽減されなかった原因としては、教師の授業方法であること、「言語」と「専門」に対する不安が軽減されなかった原因としては、一部の調査協力者は仲間や教師に依存する意識があり、ピア・レスポンスに適応できなかったことが示唆された。

以上の結果を踏まえ、第8章では、学術レポート執筆不安という観点からの、留学生のためのアカデミック・ライティング教育への提言と、研究意義、今後の課題を述べた。留学生のためのアカデミック・ライティング教育について以下の4つを提言した。それは、(1) 留学生のためのアカデミック・ライティング授業において、教師は留学生の不安に意識して指導を行うこと、(2) 段階的で、学士課程を通じたライティング指導が必要であること、(3) ピア・レスポンスなどの協働学習の理念に基づいた授業活動を取り入れる場合、留学

生の能力やビリーフに応じて個別に柔軟に対応すること、(4) 留学生自身が不安をコントロールする能力を育成すること、の4つである。

一方、今後の課題として、(1) 日本人学生の学術レポート執筆不安の実態を明らかにし、留学生と比較・対照すること、(2) 留学生の産出物(レポート)を分析し、不安の変化と能力の向上との関連を検討すること、(3) 不安軽減の仮説を立て、教育実践を行って検証すること、(4) 不安だけではなく、喜びや興味、自信、自尊感情などのポジティブな感情にも着目し、総合的に取り込むこと、の4つが述べられている。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文は、日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象に、量的及び質的な調査を行いアカデミック・ライティングにおける不安、とりわけ、論証型レポートの作成に伴う不安の実態を明らかにするとともに、アカデミック・ライティング授業による不安の変化を明らかにした労作である。その成果は、大きくは次の3点にまとめられる。

第一の成果は、学術レポート執筆不安を切り口に、中国人留学生が論証型レポートを作成する際にどのような困難を抱えているかについて、質問紙調査による量的データと授業観察による質的データを組み合わせて可視化した点である。これまでのライティング不安研究は作文一般を対象にすることが多く、学術的に高度な文章を書くことに特化した不安研究はほとんどなかった。本論文はアカデミック・ライティングにおける不安に光を当てることで、学術的な内容を日本語で苦勞して学んでいる人文社会科学系の留学生の大学・大学院での学びに資するものとなっている。

第二の成果は、豊富なデータを用いて、量的及び質的に多角的な分析を行っている点である。質的分析と量的分析を総合した分析手法である PAC 分析を用いて学習者の声を集め、先行研究の知見を踏まえて独自のアカデミック・ライティング不安尺度を作成している。次に 105 名を対象に質問紙調査を行い、統計的な分析を丁寧に行っている。まず、因子分析を行って学術レポート執筆不安の構造を明らかにし、その後、t 検定や分散分析を用いて各学習者要因による影響を詳しく検討している。さらに、授業観察を行い、SCAT を用いた質的分析を行って授業参加による不安の変化を明らかにしている。研究目的と研究対象によってさまざまな分析手法を適切に使い分けることで、本論文の記述がより説得力のあるものとなっている。

第三の成果は、学習技術型と専門基礎型というタイプの異なるライティング授業を参与観察したことにより、授業方法のタイプによって学習者の不安の変容過程が異なること、及び、授業のタイプと学習者の属性・経験との間の相互作用を明らかにしたことである。学習技術型授業とは、伝統的な知識伝授を基本とした授業、専門基礎型はピア・レスポンスを取り入れた授業であり、それぞれの授業において、学術レポート執筆不安尺度を活用した質問紙調査と半構造化インタビュー調査を3回ずつ並行的に実施し、アカデミック・

ライティングの構成要素である「基礎」「言語」「技能」「専門」についての不安の変容過程における、両者の共通点と相違点をあぶりだすことに成功している。

一方で、こうした優れた諸点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、4章と5章で行った量的分析の結果すべてが6章、7章の質的分析に生かされているとはいえない点である。重回帰分析等で得られた知見を半構造化インタビューの分析に生かしきれていない点にやや不満が残る。量的分析によって得られた知見に質的分析によって得られた結果を加味すれば、新たな不安尺度項目が得られた可能性もあろう。

第二は、学術レポートを執筆している最中、まさにそのただなかの不安については、本論文からは明らかになっていない点である。観察とインタビュー調査を行った2つの授業では、執筆時を振り返った学習者の語りを得ているが、書いている最中に心内にわきあがる不安についても、発話思考法等の調査法によって明らかにすることができれば、本論文で扱う学術レポート執筆不安をより重層的に描けたのではないだろうか。

第三は、本論文では不安のもつ負の側面、つまり学習を阻害するという点に焦点があてられているが、不安があるからこそ学習が進むという促進的側面についての言及が少ない点である。今後の研究では、不安がもつ負の側面だけでなく、不安の促進的効果にも目を向ける必要があると思われる。

しかし、これらの問題点は、本論文の達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、こうした問題点については、著者にも十分な自覚が見られ、今後の研究のなかでのさらなる考察の深まりが期待されるところである。

#### 4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

## 最終審査結果の要旨

論文審査委員 西谷 まり  
柳田 直美  
石黒 圭

2020 年 1 月 24 日、学位請求論文提出者、田佳月氏の論文「アカデミック・ライティングにおける不安の実態と授業参加による変化ー日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象にー」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、田佳月氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、田佳月氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。